

〈論文〉

かすみがうら市の田遊び 「へいさんぼう」について

飯 島 菜南子

1. はじめに

時代の変化やSNSの普及によりコンプライアンスが厳しくなった今、「性」に関する問題もまた、その壁に直面している。ここ数年で、公共のメディアにおいて、性に関する発言や過度な露出への規制が厳しくなった。

しかし、芸人の「とにかく明るい安村」が出演し話題になった、「ブリテンズ・ゴット・タレント」^(注1)では、彼の「実は下着を着用しているが、裸に見えるポーズ」というパフォーマンスが高く評価され、番組内では観客が笑ったり掛け声をかけたり、スタンディングオベーションをする等、大好評を博していたことは記憶に新しい。

また、人気キャラクターコンテンツ「超人的シェアハウスストーリー『カリスマ』」^(注2)では「性のカリスマ」として「天堂天彦」というキャラクターが登場する。このキャラクターは服を脱いだり、作中の発言や楽曲に「ピー」という規制音がかけられたり、近年のコンプライアンス事情からして見れば、ある程度リスクを伴う人物設定になっていると言える。しかし国内外問わず人気を集め、2023年には静岡県熱海市に所在する「熱海秘宝館」とコラボする等活動の幅を広げている。

そもそも日本神話の世界に遡れば、岩戸に隠れた天照大御神を外に招き出すため、天宇受売命は胸や陰部をさらけ出した状態で神憑りを行った。

この神憑りは八百万の神々の笑いを誘い、結果的に天照大御神が再度外へ出てくるきっかけとなっている。

このように、「性」に関する問題は規制されるものである反面、日本人にとっては昔から馴染み深いものであり、規制の厳しい現代においても何にも変え難い魅力として受け入れられていると言えるだろう。

これは娯楽に限らず、神事の類においても同じである。その一例として、茨城県かすみがうら市で行われる「へいさんほう」は、5月5日にかすみがうら市牛渡地区の鹿島神社において行われる神事だ。この祭りは生殖信仰に基づいて、五穀豊穡を祈願する田遊びとして伝えられてきた。祭りの内容として茨城県教育委員会により平成22年に発行された報告書では、以下の通りに記されている。

この祭りは何時の頃より始まったのか分らないが、祭りの様子を記す事とする。まず馬一頭に苗代鞍を乗せて、白の轡・脚絆・草鞋を着た前後二人ずつの馬方が操り、その馬の後に、釜の墨で真っ黒に顔を塗った平三房なる者が犁をもって登場する。馬と平三房は、社殿の周囲を三度練りまわる。この様子は苗代掻きを表したものであり、平三房が顔を黒くしているのは代掻きで汚れていることを表している。次に平三房は、木の葉が付いた枝を入れた籠を背負い、それを撒き散らしながら社殿を再度三周する。これは苗を植えている様子である。この動作が終る頃に馬場先の鳥居辺りに飯台を頭に乗せ、腹を膨らまし、萌黄色の長襦袢を着たオカメ二人が登場し、平三房に向かって手招きする。平三房はこれに応じ、オカメと共に鳥居の辺りで姿を隠す。

このオカメと平三房の動作は飯時となったので、田んぼから上がれという意味だという。やがて、拝殿には華やかに飾られた衣を身にまとった早乙女二人が扇子三木で作った笠を被り、神官と共に拝殿から下りてきて、境内中央に立つ。

この時の神官は平服に菅笠を被り手には鞭を持っている。神官は一人の早乙女の両手を持って後退すること三、四回する。元々はもう一人の早乙女も同様なことを行っていたとされる。この動作を

もって御田植祭は終了する^(注3)。

現時点でこの神事を解説する最もまとまった報告のひとつと言えるが、それでもこの報告書の記述と現在の実態とでは差異があることも事実だ。

令和6年度、令和7年度においては、平三房は籠の中に木の葉の付いた枝を入れていないほか、平三房が社殿を3周するのは1回だけであることなどを指摘できる。

また、当神事の名前「へいさんぼう」の由来として、故宮嶋新右衛門新治氏^(注4)によれば、「この神事の始めは平左とその女房の二人が田植行事を面白おかしく演出奉仕したことから、平左女房約まってへいさんぼうとなった」とのことである。

この祭りについて、浦和男は、笑いそのものを志向していないが、性的要素の濃厚さにより結果的に笑いが生じる性神事行事に分類されるとし、ここで生じる笑いは単なる「古代の性のおおらかさ」とは異なり、「性と笑いによる呪力の倍加」の側面を持ち、神霊を歓迎する芸能と見て取れると述べた。また、男根の力を苗に移すことで厄災と豊穡を実現させる、まさに感染呪術といった宗教的な意味合いを見ることは可能であるとした^(注5)。

こうした考え方は全国に伝わる田遊びにも当てはまると言えるが、へいさんぼうは類例の少ない事象を含む祭りでもある。そこで本論では、へいさんぼうと他の田遊び神事を比較するとともに、「平三房」「オカメ」「早乙女」といった祭りに関わるものの要素からへいさんぼうを見つめ、その特質性について研究していく。

2. 平成20年度のへいさんぼうと令和6年度、令和7年度のへいさんぼうの比較

■平成20年度のへいさんぼう

前に掲げた「茨城県の祭り・行事—茨城県祭り・行事調査報告書—」では、平成20年のへいさんぼうについて、次のように記録している。

祭りは、当日午前七時五十分ごろに鹿島神社の責任役である宮嶋家

及び氏子総代が鹿島神社へ集合し、祭礼準備に入る。境内に旅立て、拝殿内部に祭礼用具準備、神事の準備（幣束づくりなど）を行い、十一時から神事が始まる。まず拝殿に向かって左側の場所に神主が先頭となり、その後に氏子が一列に並ぶ。その後、順番に拝殿に上がる。神主による太鼓で神事が開始され、祝詞奏上・玉串奉奠があり、本殿の御開帳がある。その後、祝詞奏上があり、本殿が閉められる。再度太鼓がなり御神酒がふるまわれる。

一方、祭主である宮嶋家では、十三時三十分ごろから神馬の飾り付け、馬方四人の準備が行われる。十五時ごろに馬と馬方が宮嶋家を後にし、鹿島神社参道へと向かう。十五時十五分ごろに神主による太鼓の合図があり、祭りが開始される。

祭りでは、まず馬方四人に引かれた神馬が拝殿めがけて突進し、昇殿したところで、神主より祓い及び切り火を受ける。その後、時計廻りに神社を三周する。馬と馬方が鳥居の外に去ると、馬鋤をもった平三房が神社を三周し、次に背負い籠に木の葉を入れ平三房が、木の葉を蒔く仕草をする。その後、鳥居脇にある子安神社から妊婦姿のオカメ二人が頭に飯台をのせて登場し、それに平三房が木製の男根でけしかける。その行為を数度繰り返す。

その後、日の丸扇三枚で作られた菅笠を被った早乙女二人が神職に手を引かれながら、一人ずつ拝殿前を行ったり来たりし十五時四十分ごろに終了となる。

以上が茨城県教育委員会による報告書内で千葉隆司が調査した記録である。この記録と、令和6年度、令和7年度の神事の記録を比較する。なお、記録にて「平三房」と記載されている農夫の男に関して、現地で「ヘイザ」と呼ばれていること、農夫の名前が「平左」とであるという伝承から、以降の記録では「平左」と表記する。

■令和6年度のへいさんぼう

10:56	神事開始。神職2人、氏子15人昇殿。
10:58	祝詞奏上。
11:03	宮司による幣殿の開帳。
11:12	玉串奉奠。
11:19	宮司による幣殿の閉帳。
11:23	神事終了。
11:26	神職・氏子降殿。
13:48	宮嶋家にて神馬・馬方4人の装飾開始。(神馬の腹巻紛失のため、着用せず)
14:34	宮嶋家出発。
14:40	神馬・馬方神社に到着。
15:00	一番太鼓奏上。
15:15	二番太鼓奏上。
15:25	三番太鼓奏上。神事開始。 神馬入場後、拝殿前でお祓いと切り火を受ける。
15:29	神馬・馬方4人が社殿を3周。その後退場。
15:32	平左入場。男根棒を振り回し、社殿を3周。
15:34	オカメ登場。平左は籠の中の男根棒に持ち替え、オカメと性交の様を演ずる。 その後退場。
15:37	宮司・早乙女2人登場。 ひとりずつ神職に手を引かれ、拝殿の前を後退する所作を行う。
15:39	神事終了。

■令和7年度のへいさんぼう

10:55	神事開始。神職2人、氏子11人昇殿。
10:57	祝詞奏上。
11:01	宮司による幣殿の開帳。
11:09	玉串奉奠。
11:17	宮司による幣殿の閉帳。
11:20	神事終了。
11:22	神職・氏子降殿。
14:00	宮嶋家にて神馬・馬方4人の装飾開始。(神馬の腹帯有り)
14:35	宮嶋家出発。
15:00	一番太鼓奏上。
15:15	二番太鼓奏上。

15:25	三番太鼓奏上。神事開始。
15:30	神馬入場。拝殿前でお祓いと切り火を受ける。 その後、神馬・馬方4人が社殿を3周し、退場。
15:31	平左入場。男根棒を振り回し、社殿を3周。
15:34	オカメ登場。平左は籠の中の男根棒に持ち替え、オカメと性交の様を演ずる。 その後退場。
15:39	宮司・早乙女2人登場。 ひとりずつ神職に手を引かれ、拝殿の前を後退する所作を行う。
15:40	神事終了。

■祭りに関わる人物

祭りに関わる人物として、最も特徴的なのは平左である。現在の平左は頭に手拭いを巻き、そこに幣束を差し込む。上半身は甚平のような形状の青い衣服を着用、背には籠を背負い、馬鉤とオカメにけしかける際の太い男根棒を入れている。手には振り回す用の細い男根棒を握る。

オカメは2人登場するが、どちらも同じオカメ面を着用している。面に関して、令和6年度は新しいプラスチック製のものを、令和7年度は古い木製のものを使用していた。令和7年度は、オカメ役の男性が「今年はちゃんとした面をつけよう」という発言をしたことによって古い面を使う運びとなった。古いオカメ面は大小サイズがあるが、新しいものに関しては差異は無い。1人は無地の緑色の着物を、1人は藍色に近い縦縞の着物を着用し、頭に飯台を乗せ、「ホーイホーイ」と手招きながら平左を呼び込む。

馬と馬方に関して、まず神馬の装飾は、木と藁でできた「鞍」、紙垂が四本ついた「胸」と呼ばれる装飾、尾に掛ける「尻毛」と呼ばれる装飾の順番で飾り付けられる。令和6年度、令和7年度は祭主である宮嶋家の親戚が営む「宮嶋ライディングファーム」から借用されたサラブレッドであった。また、頭の鬘をしばり、そこに幣束を差し込む。4人の馬方も神馬、平左と同じく、頭に幣束を差し込んでいる。脚絆と草履、褌の着用が見られる。

早乙女2人は赤い無地の着物に日の丸扇3木を組み合わせた菅笠を被り、2人の手を引く宮司は菅笠・平服姿で登場する。宮司は手に篠竹を持っている。

■過去との相違点

馬の装飾は木と藁でできた「鞍」、紙垂が4本ついた「胸」と呼ばれる装飾、尾に掛ける「尻毛」と呼ばれる装飾のほかに、「腹帯」という馬の腹に巻き付けるものがある。令和6年度は探しても見当たらなかったため、馬には腹帯が付けられなかった。令和7年度においては腹帯が着用されている。

また、前掲「茨城県の祭り・行事—茨城県祭り・行事調査報告書—」には「木の葉が付いた枝を入れた籠を背負い、それを撒き散らしながら社殿を再度三周する」とあるが、令和6年度、令和7年度は、籠の中に男根棒と代掻きの道具のみ入っている。現時点で確認したのは次の通りである。(かすみがうらネット「かすみがうらを巡る」)

平成20年…籠の中に枝葉を入れ、撒き散らす行為をしている。(「茨城県の祭り・行事—茨城県祭り・行事調査報告書—」茨城県教育委員会)

平成23年…籠の中に男根棒を入れ、馬鋤をもって神社を3周。枝葉は入っていないため、撒き散らす行為はしていないものと思われる^(注6)。

平成27年…籠の中に枝葉を入れ、馬鋤を手にとって神社を回る。籠の中身を撒き散らす行為をしたかは不明^(注7)。(X@doraebon_jp 平成27年5月9日)

平成30年…籠の中に枝葉を入れ、馬鋤を手にとって神社を回る。撒き散らしたかは不明であるが、「苗配りの真似をしながら」と記載されているXの投稿が見受けられる。写真を確認する限り、枝葉が地面に散らばっている様子はない^(注8)。(X@seimei421haniwa 平成30年5月13日)

令和元年…籠の中に男根棒のみを入れている。馬鋤は持っていない。枝葉は入っていないため、撒き散らす行為はしていないものと思われる^(注9)。(X@bicycle_123 令和元年5月6日)

「茨城県の祭り・行事—茨城県祭り・行事調査報告書—」には「オカメと共に鳥居のあたりで姿を隠す」とあったが、令和6年度、令和7年度は隠れていない。平成20年度の資料を見ても鳥居の陰に隠れてはいないため、継承されていく過程で変化したものと考えられる。

■令和6年度、令和7年度の調査結果

先に示した令和6年度、令和7年度の次第と合わせていくつか興味深い点を示しておきたい。聞き取り調査では、へいさんぼうは祭主である宮嶋家（宮嶋新右衛門）と総代である塚本家（塚本五郎衛門彦五郎）による世襲制であることが分かった。また、正月に行う子の刻参り、丑の刻参りはこの両家が参拝し終わってからではないと、氏子は参拝できないきたりが現在も続いているようだ。また、神事にはもともと農耕馬を使用していたが、機械化の影響により、昭和40～50年代頃までは馬の代わりに耕運機を使用していた。この代用はかなり不評だったという。サラブレッドの代わりにポニーが来た年もあった。

他にも祭りに関わる人物について、早乙女はもともと小学校入学前の女子が3年任期で行っていた。現在は少子化により子供がいないため、牛渡以外の地区もあたり、早乙女を探しているとのことである。また、現在平左はひょっとこの面を着用しているが、もともとは面をつけておらず、YouTubeなどの媒体にへいさんぼうの動画や写真が投稿されるようになり、個人情報保護のために着けるようになったそうだ。面の着用が見られたのは2019年からで、2018年に平左役が現在も務める総代の塚本兼二氏に変わった。そのタイミングで面の着用を採用したことが考えられる。SNS等の普及に合わせて祭りの形が変化した例として、現代化が作用している面白い事例である。一方、今後の日本における現代化と祭りの視点でみると問題点であるとも言える。

そのほか、へいさんぼうは戦後、その生々しさから規制がかかったことがあること、神社由緒は色々な所に貸していたところ紛失したこと、神事に合わせ、境内のすぐ側で奉納射会が行われること等が聞き取り調査により、知るに至った。

3. 田遊びの類例との比較～板橋の田遊びを例として～

へいさんぼうのような田遊びは「稲作儀礼」の一種であり、『日本民俗大辞典』による「稲作儀礼」の説明は、次のようになされている。少々長いが、論旨に関わるため引用しよう。

水稻の栽培過程の区切りごとに行われる諸儀礼の総称。現行の稲作儀礼は、予祝儀礼・播種儀礼・田植え儀礼・成育儀礼・収穫儀礼の五つの儀礼群から構成されている。〈略〉予祝儀礼は、実際の稲作に先立って豊作を祈念する儀礼で、種子粃の保存期間の年初から小正月の十五日前後に集中している。稲作作業を模擬的に行う田打正月・鋤入れ・庭田植・田遊び、稲の結実の姿を示して豊作を祈願する稲の花・餅花、害鳥獣駆除への類感呪術である鳥追い・モグラ打ち、さらに豊凶の占いである粥占・豆占・鳥占いなどがある。播種儀礼は苗代への播種や摘み田などの直播き稲作の播種のときの儀礼で、水口祭・ミトマツリ・種子播き祝いなどといって、苗代田へ草木や季節の花、小正月の削り掛けなどを立て、焼米や洗米を供えて田の神を迎える儀礼である。この後の田植え儀礼でも、田植え開始時にサオリ、サビラキ、サイケ、サンバイオロシなどの初田植の儀礼があって、草木や季節の花を田に立てたり、苗を家の神にあげて再び田の神を迎える。そして、田植えが終わるとさなぶり、サノボリ、しろみて、泥休み、馬鋤洗い、野上りなどといって田植えの終了を祝い、田の神を送る儀礼がある。成育儀礼は稲の無事な成育を願う呪術的儀礼で、害虫に対する虫送り、早糖時の雨乞い、台風に対する風祭が広く行われ、長雨に対しての日乞いとか青祈薦を行うところもある。虫送りや風祭は、害虫や風の発生を悪霊の仕業と考え、この悪霊を村境などに送る鎮送呪術や対抗呪術の形式をもっている。収穫儀礼は稲刈りから脱穀・調製にかけての儀礼で、稲刈り開始時は穂掛け、終了時には刈上げ、脱穀・調製後には稲上げ・庭上りの儀礼がある^(注10)。

へいさんぼうは、5つに分類された稲作儀礼のうち、「予祝儀礼」に該当する。同辞典では、田遊びについて「新春や田植え時期に、稲作の理想的な耕作過程を模擬的に演ずる予祝行事。御田・春田打・お田植祭

などとも呼ぶ」と説明しているが、へいさんぼうは稲刈りまでを演じず田植えまでの過程を表現した、簡略化された神事である。類似の田遊びとして挙げられる、東京都板橋区の徳丸北野神社と赤塚諏訪神社の田遊びは稲作の一年の所作を行うため、簡略化はへいさんぼうの特徴と言えるだろう。

徳丸北野神社と赤塚諏訪神社の田遊びは、昭和 51 年、「板橋の田遊び」として国の重要無形民俗文化財に指定された。徳丸北野神社では 2 月 11 日に、赤塚諏訪神社では 2 月 13 日に神事が執り行われ、へいさんぼうと異なり、双方夜間に行われる。

徳丸北野神社の田遊びは、太鼓の音や囃子歌の調子に合わせて、四方に向かって種をまく「種まき」、子どもが扮する早乙女を 1 人ずつ太鼓の上に乗せ、一同で胴上げする「胴上げ」、太鼓の上に道具を積み上げ皆で手を合わせて稲穂を褒める「穂むら積み」が主なスケジュールである。種まきの場面では牛の面を手にとって田起こしの様子を演じたり、胴上げの場面では翁やオカメ、陽物をつけた人形なども登場し子孫繁栄も祈願している。へいさんぼうでは早乙女の役を女兒 2 人が担うが、この祭りにおける早乙女は 4 人、性別に決まりはなく、子どもであれば良いようだ。また、この田遊びは「モガリ」と呼ばれる舞台の中で行われる。ここでのモガリは四隅に篠竹を立て、それらをしめ縄で結び囲った場所のことを言う。元々「モガリ」とは遺体を埋葬するまでの仮安置所や、埋葬するまでの葬送儀礼の呼称であり、田遊びの神事においては聖域とそれ以外の空間の境界線として捉えることができるだろうか。赤塚諏訪神社でも同じく「モガリ」の中で神事が行われる^(注 11)。

赤塚諏訪神社の田遊びは、神輿渡御から始まり、色紙が敷き詰められた花籠を取り付けた槍の前で、太鼓に合わせて獅子が舞う「槍突き」、狩袴を着用し、右手に幣、左手に錫杖を持った天狗の地鎮の舞である「天狗御鉾の舞」、旧年の災厄を焼き払い、新年の家内安全、子孫繁栄を祈る「お篝り」が主なスケジュールである^(注 12)。

なお、へいさんぼうでは獅子舞が行われない。その理由として、「へいさんぼうは獅子舞と相撲を嫌う為である」と、天祿稻荷神社宮司の井

上努氏という。これもへいさんぼうの特徴であり、赤塚諏訪神社との相違点のひとつである。そこで、板橋の田遊びとへいさんぼうの共通点、相違点にはどんなものがあるか考察していく。

4. 類例との相違点

へいさんぼうと板橋の田遊びの大きな共通点として、翁とオカメの登場が挙げられる。へいさんぼうでは木製の男根棒でオカメにけしかけるのに対し、板橋の田遊びでは翁とオカメ（翁は太郎次、オカメはやすめ）が抱き合うことで性交の様を表現する。さらに徳丸北野神社に限って言えば、男性器を模る道具が登場する点が共通しており、ここでは男根の付いた人形を持ってモガリの周りを練り歩く。赤塚諏訪神社では、性器信仰とは異なるが、藁で作られた人形が登場する。これは翁とオカメの田ばらみの所作を省略し、子どもの出産という結果のみを表したものであると捉えられる。

また、田起こしから田植えまでの所作を行う点も共通している。田起こしに関する共通点として、動物の登場を挙げることできるが、板橋の田遊びは牛を表した面をつけて田起こしを表現する一方、へいさんぼうでは本物の馬を走らせるため、共通点でありながら相違点の側面も併せ持っている。

対して、板橋区の田遊びとの相違点として挙げられるのは次の事項である。

1つ目に、へいさんぼうではオカメが2人であるという点である。板橋の田遊びに限らず、一般的な田遊びは男1人、オカメ1人であり、オカメが複数登場する田遊びの例は稀だと言えよう。

2つ目に翁の面に代掻きで付着した泥を表す炭が塗られている点である。これは代掻きの作業で付着した泥を表したもののだが、平左がお面をつける前からこの表現はなされていた。泥汚れを煤で表す理由として、煤は竈に付着することから簡単に入手できるためではないかということである。

3つ目に、へいさんぼうにはモガリが設置されない点である。決められた領域で神事を行う板橋の田遊びと異なり、へいさんぼうの行動範囲

は参道から境内までと広く及ぶ。また、モガリの中で氏子が唱える唱え事もへいさんぼうには存在せず、この点も相違する。

4つ目に、早乙女と扇の関係性である。へいさんぼうにおける早乙女は、日の丸の扇を3枚重ねた菅笠を被っているのが特徴であるが、徳丸北野神社では早乙女を胴上げしている間、早乙女を扇で仰ぐのが特徴だ。また、赤塚諏訪神社では早乙女を呼び込む際に扇を使用する。

5つ目に、へいさんぼうは獅子舞を行わない点である。獅子舞は徳丸北野神社と赤塚諏訪神社の両方に登場するが、へいさんぼうで獅子舞が行われない理由は「獅子舞と相撲を嫌うから」であるらしい。獅子舞と田遊びは密接に関わる問題であることは、折口信夫の指摘からも伺い知ることができる。

次に、獅子と駒とが出る。此二者も、元は農村を護るものであったのだが、今では両者とも、悪いもの・妨げをするものと解釈されて、降伏させる形になって居るのが多い。

此は、呉楽にまで遡つて見なければならぬと思ふ。呉楽が段々変じて、田楽に採り入れられ、大神楽にもなったので、今では、悪魔を退散させるものの様でもあり、悪魔そのものでもある様な、訣の訣らないものになつてしまっているが、此の出て来るにも、種々な意味があり、多くの変化があるが、其種の一つは、鹿である。古くは、鹿・猪、共にししと言うた。肉の供給者の意である。さうして、鹿は、農村を荒す動物の代表物と見られて居たので、随つて、悪霊の代表とも見られ、此を謝らして、農作の保証をさせる所作が、古くからあつた様だ^(注13)。

引用した折口の説は、当然へいさんぼうに言及したものではなく、獅子の問題を論じたものであるが、ここから分かる通り、獅子は元は農村を守るものであったが、次第に悪霊としての側面を持つようになった。獅子について日本国語大辞典には、狛犬と対にして神社の社殿や社頭の左側において魔除けとする、という説明も見られる^(注14)。

これを踏まえて板橋の事例を取り上げてみることにする。

まず、徳丸北野神社では獅子の登場の前に暴れ馬を表す「駒」が松明

に先導されながら入ってくる。その後、獅子が入り、「はま矢」と呼ばれる2本の矢を交差させたようなものを持ちながら大声を上げる男が入場する。松明に先導されてやってくるのは、稲に付く悪い病気や害虫が水田や里の中に入っていくないようにするためであるという。この祭りでは、病気や害虫を防ぐために獅子が招かれていると考えられるだろう。

一方、赤塚諏訪神社では、祭りの広場に移動すると、「花籠」と呼ばれる槍が人々の手によって動かされる。徳丸北野神社でいうところの松明の役割を果たすのが花籠であるのだろう。この花籠は稲の花を表していると伝えられ、祭りの最中はもがりに立てられているものだ。まず、花籠に誘われるように九字の舞を舞う「弓」が入り、その後「駒」が入る。駒に乗る「駒っ子」は3歳までの男児であり、健やかな成長への願いが込められていると言う。その後、「獅子」が入り、花籠と対峙し、最後は大きく後ずさって退場する流れになる。この行事は稲の生育を阻む害虫や天災を跳ねのけることを願って行われると伝えられており、この祭りでは獅子は悪霊として考え、花籠がそれをはねのけていると考えられるだろう。また、花籠が祭りの広場から神社に戻り、もがりに再度立てかけられると、その前で天狗が舞を舞う。これは地鎮のために行われると言い、天狗は悪霊として考えるに言い、同じ花籠と対峙するものとしても、獅子と天狗は異なった性質を持つことが伺える。へいさんぼうにおいては天狗に当てはまるものは登場しないため、赤塚諏訪神社の田遊びとの相違点として天狗の登場も挙げられる。

6つ目に、板橋の田遊びが2月の夜に行われるのに対し、へいさんぼうは5月の昼に行われる点である。そもそも田遊びのような予祝行事は年初めから小正月に集中する性質があり、『民俗大辞典』^(注10)によれば、これは種子粃の保存期間であるためだそう。もちろん、正月以外の時期に行われる田遊びもあり、神奈川県鶴見区の「鶴見の田遊び」は4月29日の午後4時ごろから執り行われている。また、前掲報告書によれば、へいさんぼうは大正年間までは旧暦の5月5日に行っていたらしい。旧暦の5月5日は、現在では3月下旬から4月上旬にあたるため、現代のへいさんぼうよりもおよそ1か月ほど早くに実施されていたことが確認

できる。このことから、田遊びの時期や時間はその土地の生活スタイルに合わせたものになっていると言えるだろう。

では、ここで挙げられた相違点は、どのような意味を持っているのだろうか。これらの相違点からへいさんほうの特質性を推測してみよう。

5. 類例との相違点の意義

■平左とオカメ～2人のオカメの意義～

まず、大きな相違点として取り上げたオカメの問題である。へいさんほうにはオカメが2人登場するが、この意義とは何であろうか。同一の面が複数登場する由来は、地区の分裂なども考えられる。もともと1つだった面を分裂した地区同士が新たに作り、再度合併した結果、1つだった面が複数になるといったものだ。祭りの行われている鹿島神社の鎮座する牛渡と言う地区は、かつて牛渡村という村であった。この村は大字牛渡、大字有河の2つの地区によって成り立っていたものの、中世より領主が異なったため、各一村の形になり、明治22年の町村制によって併合する流れとなった^(注15)。

また、『出島村史（続編）』によると牛渡鹿島神社の「へいさんほう」は春の祭りで、同じく牛渡にある上高谷鹿島神社の「ドギョウサマ」は秋の祭りと言われているとあり、その詳細は不明だが、両神社の関係性が指摘されている。ドギョウサマとは木製男根のことで、これを薦で包んで一年間トウケの軒下に吊るし、12月15日の祭礼日になると藁で作った猿田彦人形にドギョウサマをつけ、次のトウケに引き渡すというものであるそうだ。オカメ面が2つあることの理由として、分裂から再合併の流れによって各村落がそれぞれ面を所有した可能性や、上高谷との関連性が考えられるが、歴史的変遷の中で実際に面を2つ作ったという事実確認は取れていないため、あくまでも考察の域を出ないものとなる^(注16)。

この問題を推測するにあたって、まず平左とオカメは何者か、という視点で両者を考察してみよう。平左は農夫、オカメはその妻であるという考え方もあるが、果たして本当にそうだろうか。平左の身体的な特徴の1つに「顔に煤を塗っている」点が挙げられるが、顔に泥や煤を塗る

ことは異界から来たものの象徴であるともいえる。代表的な例として挙げられるのは沖縄県に伝わる泥まみれの来訪者、「パーントゥ」である。また、泥の呪力について、内田幸彦は次のように指摘する。

墨あるいは煤は、泥と同様に災厄を祓う効果を持つ力を期待されて用いられている。つまり、墨あるいは煤と泥は、儀礼的な文脈において相互に入れ替え可能な、同じ意味を持つものとして取り扱われていると理解することができる^(注17)。

この指摘のように、泥、あるいは煤や墨は災厄を祓う呪力を持つものであり、平左は田にかかる災厄を祓う存在としてやってくると考えられる。

他にも、冒頭に取り上げた浦和男の論では、平左が男根棒を振り回しながら社殿を3周するのは、生殖器の持つ呪力を苗に移す目的があるとし、これを見た観客が卑猥さを笑うことで呪力が倍增するのだというように解釈している。これらの点から、単なる農夫といった次元を超えて、異界の者、いわば神のごとき存在として平左を捉えることができるのではないだろうか。

仮に、こうした田の神の属性を平左に認めた場合、その子を孕むオカメは神に近い巫女のような存在、もしくは土地を擬人的に表したような、異界の者としての側面を持ち合わせていると考えることはできないだろうか。来訪者と異なり、その土地で自然的に発生した神の存在を折口信夫は「精霊」と呼んだうえで、「神」と「精霊」の関係について「神と精霊との問答が、神に扮する者と、人との問答になる。そして、神になつてゐる人と、其を接待する村々の処女たちとの間の問答になる」^(注18)と述べている。へいさんぼうでは、オカメは「ホーイホーイ」と声を出して手招きしながら平左を呼び込む。これは昼食時だから田から上がれ、という意味を表すというが、神と精霊としての問答であると考えればまた別の見方が出来るのではないか。大きな声を出して物を言うことは「なのる」とこと同義であると折口は考えた。名を相手に教えることは、古代では婚姻関係の成立を意味する。つまり、「ホーイホーイ」と大きな声を出して平左に求婚し、子を孕ませる、つまりオカメを通して土地の豊かな実りを表しているのではないかといった想像も許されよう。

異界の者としてのオカメの一面があると論じたが、ではどうして2人も必要なだろう。常光徹による『しぐさの民俗学』には、「同じ状態のものが同時に存在すること」について、「相孕み」を例に挙げて紹介している。相孕みとは、一家に2人以上の妊婦がいることを言う。

妊婦が他の妊婦の家を訪れることで、一時的に相孕み状態が発生するのも嫌われたことがわかる。石塚が言うように「成長する魂に対する他の魂からの影響」を忌むのであろう。ただ、本論の関心は、そのような相互の魂に影響を及ぼしかねないと心配する心意の底に流れている民俗的な論理である。いずれの事例も、「同時に同じ」というあいまいで流動的な状態をそのまま放置すれば、相互の影響関係に不均衡が生じ、勝ち負けで表現されるような何らかの異常事態が発生することを予告している。そこで、相孕みが判明するといずれか一方が転居するとか、相手が家畜であれば妊娠した犬猫を他家に引き取ってもらったり、生まれた子を捨てることで回避するのである。とくに猫との相孕みを忌むのは、この動物が魔性のモノとしての属性をつよくもつからであろう^(注19)。

このように、オカメが2人いる状態、常光の言う「同時に同じ」は本来忌まれているものだと分かる。また、2つで1つの例として、双生児の問題を取り上げてみよう。

板橋春夫による『誕生と死の民俗学』では、双生児が誕生した際にどのような儀礼をおこなっていたかを全国の事例を集めて比較した。ここで板橋が取り上げたのが、産婦の夫が屋根に登り、「嫁が双子を生んだ」と大声で叫ぶという事例である。大声で叫ぶ目的について、板橋は次のように解釈した。

双生児の誕生を知らせるために大声で叫ぶ儀礼の目的は、双生児誕生の事実を広く知らせて集落内に双生児が二度と誕生しないようにするという再発防止にあるといえる。これは双生児を産んだ家族への制裁の一種と考えられる。

このように、双生児誕生儀礼はあくまでも、集落内に生じた普段と異なる出来事、すなわち異常性に対しての応急処置であり、恥をかく

ことに意味があるとする民間解説に注目すべきであろう^(注20)。

また、同書で板橋は、外国社会における双生児問題も取り上げ、アフリカの部族社会においては、双生児の出生を異常視し、生まれたばかりの赤子を殺す社会集団もある一方、対極として双生児を神聖視する部族もあることを示した。

このように、双生児が誕生することは国内外においても超常現象であり、忌み嫌われる一方で神聖視される場合もあることが理解できる。二者一対の神聖さ、その異常さを2人のオカメに当てはめることで、オカメが人間ではないことを表す1つの証拠として見ることはできないだろうか。

■早乙女と扇～扇を被る行為～

へいさんぼうの早乙女は3枚の扇を円状にしたものを菅笠として被るが、これは板橋の田遊びとの相違に留まらず、全国的に見ても珍しい特徴の1つである。早乙女と扇は結びついて登場することもあるが、早乙女を呼び込む際や風を送る際など、大抵は手に持って仰ぐ使い方をする。わざわざ頭に被る意義とは何だろうか。へいさんぼうの神事を執り行う天祿稲荷神社の井上努宮司は、「早乙女となる女兒の頭のサイズにあう菅笠が無かったために代用したのではないか」との見解を述べられている。子どもの頭のサイズの菅笠がないための代用で扇を使用するという仮説も十分に考えられるが、ここではさらに民俗的な問題に踏み込んで考えてみたい。

そもそも、扇にはどのような力があるのか確認してみよう。高橋貴は、扇のもつ役割を四つに分類して考えている。それが「形状の扇」「霊力の扇」「しぐさの扇」「風流の扇」である。神事における扇の意義は「霊力の扇」に分類されるだろう。「霊力の扇」で高橋は以下のように述べている。

霊力の扇は神仏や呪的な力と関係する。人と神、霊力とのコミュニケーションである。この場合、扇はご神体や依代になり、霊的な力を持つシンボルとなる^(注21)。

へいさんぼうの早乙女に選ばれる少女はかつて、体の弱い女兒であつたらしい。『出島村史』には「此早乙女とならん者身体の虚弱なる女子

が丈夫にならんことを祈願し2～3年継続して志願するを例とす」(注22)とある。身体の欠損や負性が見られる特性は神に近い者たちのステイグマであることが推測されよう。体の欠損が、神聖さと同一視される例としては、エビスサマの難聴や、奥能登で行われる田の神神事「アエノコト」でやって来る来訪神が盲目であることなどが挙げられる。神を招く呪具としての扇を被ることで、呪術的な力の恩恵を受け、病気から体を守ろうとする目的が考えられる一方で、あえて体の弱い女児を早乙女に選んだのは、その呪術的な特性を証し立てていると言えよう。

なお、高橋貴は「扇を笠にする」という事例を紹介していることも興味深い。東京都世田谷区の山王祭の踊屋台で踊る女性の踊り子が2枚の扇を使用した扇笠を被って踊っていたり、また、5枚の団扇の柄を縛った団扇笠を子供が被って踊っていたそうである。これは踊り手の装飾のためであると高橋は解釈しているが、これらも単なる装飾にとどまらず、へいさんぼうの早乙女と同じく、その呪性を物語るものだろう。

■へいさんぼうと獅子舞

最後に、板橋の田遊びとのもうひとつの相違点である、へいさんぼうに獅子舞が登場しないことについてだ。へいさんぼうは獅子舞を嫌うからであるということは繰り返し紹介したが、なぜ獅子舞を嫌っているかははっきりとした理由は未だよく分からないのが現状だ。へいさんぼうで神職を務める井上努宮司は、獅子舞を行ったことで何かしらの災いが起こったために獅子舞をやらないのではないかと語る。「牛渡」という地名に由来する理由も考えられそうだが、同じ「牛渡」という名を持つ山形県遊佐町の「牛渡川」と福島県浪江町牛渡を調べてみても、獅子舞を嫌うといった例は見つからない。

田遊びと獅子舞の関係について先述した点からは、へいさんぼうにおける獅子舞は田や里にやってくる災厄として捉えられているとも推測できようが、ここは今後の課題としたい。

6. おわりに

本論では、性の民俗として茨城県かすみがうら市における田遊び、「へいさんぼう」を、類似の例である板橋の田遊びと比較し、両者の差異について考えながらへいさんぼうの特質性を見た。しかし、へいさんぼうについては未だ詳細が分からない部分も多い。他にも、へいさんぼうが行われるかすみがうら市周辺で、過去行われていた可能性のある田遊びについて調べることが出来なかった。今後は茨城県内で類似の田遊びの例が行われた記録があるかを調査するほか、板橋の田遊び以外の類例を見つけ、それらとも比較・研究することでへいさんぼうの特質や詳細な性格について、さらに詳しく調査していく必要があると考えている。引き続きへいさんぼうを追いかけて、年度ごとのデータ収集を行い、経年変化を見ていく所存である。

注

(注1) 「ブリテンズ・ゴッド・タレント」Independent Television (<https://www.itv.com/britainsgottalent> 2024年12月3日 閲覧)

(注2) 「超人的シェアハウスストーリー『カリスマ』」EVIL LINE RECORDS、株式会社 Dazed (<https://charisma-house.com/character/> 2024年12月3日 閲覧)

(注3) 茨城県教育委員会『茨城県の祭り・行事—茨城県祭り・行事報告書—』(2008年3月)

(注4) まだ世襲をしていないが、次の宮嶋新右衛門になる方の曾祖父に当たる。

(注5) 浦和男「祭礼の笑い」(『笑い学研究』22号 2015年8月)

(注6) かすみがうらネット「かすみがうらを巡る」(2011年の記録 <https://www.kasumigaura.net/mapping/page/A0227.html> 2024年12月3日 閲覧)

(注7) X @ doraebon_jp (2015年5月9日投稿)

(注8) X @ seimei421haniwa (2018年5月13日投稿)

(注9) X @ bicycle_123 (2019年5月6日投稿)

(注10) 小川直之「稲作儀礼」(『民俗学大辞典』吉川弘文館、2000年)

(注11) 板橋区教育委員会「板橋の田遊び」(<https://www.city.itabashi.tokyo.jp/bunka/bunkazi/bunkazai/1004839.html> 2024年12月3日 閲覧)

205 かすみがうら市の田遊び「へいさんぼう」について

(注12) (注11)に同じ

(注13) 『折口信夫全集』第3巻(中央公論社、1995年 365頁～366頁)

(注14) 『日本国語大辞典』(小学館、1974年1月)

(注15) 塙泉嶺『新治群郷土史』(宗教新聞社、大正14年11月)

(注16) かすみがうら市郷土資料館『へいさんぼうと田遊び—米作りへの祈りと芸能の文化—』(2011年8月)

(注17) 内田幸彦「泥の呪力」(「埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要第12号」平成30年3月 25頁～47頁)

(注18) 西村亨『折口信夫辞典』(大修館書店、1988年7月 78頁)

(注19) 常光徹『しぐさの民俗学』(ミネルヴァ書房、2007年)

(注20) 板橋春夫『誕生と死の民俗学』(吉川弘文館、2007年)

(注21) 高橋貴「扇の多義性—四つの類例—」(愛知大学国際コミュニケーション学会「文明21」2004年3月)

(注22) 『出島村史』(出島村教育委員会、1971年)

令和7年度のへいさんぼうの様子(撮影者 小松崎絢子)

